

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380872

研究課題名(和文) 幼児期の対人関係と社会性の発達との関連

研究課題名(英文) Young children's interpersonal relationships and their social development

研究代表者

園田 菜摘 (SONODA, Natsumi)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：00332544

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幼稚園年少児から年長児にかけての3年間において、幼児の対人的自己効力感が母親、保育者とのかかわりの中でどのように発達するのかを検討した。その結果、年少児の対人的自己効力感は母親の自立尊重的なしつけ行動が関連すること、年中児の対人的自己効力感は幼児の保育者への認知が関連すること、年長児の対人的自己効力感は母親の育児不安が関連することが示された。以上のことから、幼児期の3年間の発達の中で、対人的自己効力感に影響を与える母親、保育者の要因はそれぞれ異なる可能性があることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine the correlations between mother- and teacher-child relationships and young children's social self-efficacy in three years longitudinal study. When the children were 3-to-4-year-olds, their social self-efficacy was associated with their mothers' independence-promoting parenting style. One year later, the 4-to5-year-old children's social self-efficacy was related to their perceptions of preschool teachers. Moreover, the 5-to-6-year old children's social self-efficacy was correlated to their mothers' parenting anxiety. These results suggest that the effects of mother- and teacher- child relationships on young children's social self-efficacy may differ in children's developmental stages.

研究分野：幼児の社会性

キーワード：幼児 対人的自己効力感 母親の養育態度 保育者への認知 縦断研究

## 1. 研究開始当初の背景

これまで愛着研究において、母親との関係性と幼児の社会性の発達との関連について数多くの研究が行われており、母親との愛着が安定している子どもほどコミュニケーション・スキルがあり、向社会的、共感的な行動が多いなど、社会的に有能であることが示されている。子どもの他者理解についても、12ヶ月時点での母親との愛着の安定性が4歳時点での子どもの心の理論の発達と関連することが示されており、他者との関係性が子どもの他者理解能力の発達に影響を与えることが示唆されている。

一方、母親以外の関係性については、父親への愛着の子どもの発達への影響は相対的に小さいことや、母親ではなく保育者との愛着の方が子どもの向社会的行動や社会的コンピテンスの高さと関連するなど、幼児が関係を結ぶ対象の違いによって子どもの発達が異なる様相が報告され、幼児期の対人関係の広がりを焦点に当てた検討の重要性が示唆されている。

しかし、様々な対象に対する幼児の関係性の影響について日本で調べた研究はまだ非常に少ないため、日本でも同様の結果が示されるのかはわかっていない。本研究の研究代表者は、これまで科学研究費補助金の交付を受け、保育経験の長さが異なる新入園児と進級園児とでは母親との関係性と子どもの社会性の発達との関連の仕方が異なること (Sonoda, 2005. European Congress of Psychology で学会発表) 母親との関係と保育者との関係とでは子どもの自己意識・他者理解能力との関連の仕方が異なること (Sonoda, 2008. American Psychological Association で学会発表)、を明らかにしてきた。これらの研究の過程で、幼児期の社会性の発達をとらえる上では、母親との関係性だけでなく、様々な対象との関係性を包括的に検討することが必要であると考え、本研究の着想に至った。様々な対象との関係性がどのように子どもの社会性の発達に影響を及ぼしているのかについて明らかにすることは、社会性の発達研究の進展にとって不可欠であると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究では、対人関係が広がり始める幼稚園年少から年中、年長にかけての3年間の縦断研究の中で、子どもの社会性の発達を縦断的に追跡し、それに対する母親、保育者といった重要な他者との関係性がどのような影響を与えるのかについて、包括的な検討を行う。

特に、保育者との関係性は母親と仲間との関係をつなぐ上で重要な役割を果たすと仮定し、親、保育者といった個別の関係性と子どもの発達との関連だけでなく、相互の対象

同士の関係性の形成過程についても検討を行う。その際、関係性の指標として、愛着関係だけでなく、子ども自身が相手をどのような存在として認知しているか、といった認知的な側面も含めて検討を行う。また、子どもの社会性の発達については、幼児期に獲得される対人的な有能さといった社会的コンピテンスや、相手の感情や心の理解といった他者理解能力に重点を置きながら、社会性の発達が仲間を中心としたその後の関係性の獲得にどのようにつながっていくのかについても、本研究で検討していく。

このように、本研究を行うことで、多くの子どもが集団生活を経験する3歳以降の対人関係の広がりにおいて、母親、保育者といった重要な他者との関係性が、子どもの社会性の発達にどのように関連していくのかについて、包括的な示唆が得られると考えられる。

## 3. 研究の方法

本研究では、幼稚園に入園した年少児(3歳児)から小学校に上がる直前の年長児(5歳児)までの3年間の縦断研究を行い、各年齢段階における子どもの母親、保育者との関係性と子どもの社会性の発達との関連について検討を行った。その際、関係性の測定については愛着関係だけでなく、子ども自身の相手への認知的な「とらえ方」についても焦点を当て、子どもの社会的コンピテンス、他者理解能力の発達にどのように関連するかについて、包括的に検討を行った。

### (1)平成 25 年度

1年目の平成 25 年度は、幼稚園に新しく入園した3歳児を対象に、母親の養育態度、自尊感情が子どもの社会的コンピテンスにどのように影響するのか検討を行った。対象は、私立幼稚園に在園する年少児クラスの子どもとその母親である。

まず平成 25 年 9 月に、母親に養育態度、自尊感情を測定するための質問紙を幼稚園を通して配布、回収を行ったところ、47名の母親から回答を得た。因子分析の結果、養育態度においては第1因子「命令的しつけ」、第2因子「自立尊重的しつけ」、第3因子「保護的しつけ」、第4因子「独立促進的しつけ」の4因子が抽出され、自尊感情においては、第1因子「対人的自身の無さ」、第2因子「効力感の高さ」、第3因子「自己への過小評価」、第4因子「自己嫌悪」の4因子が抽出された。分析には因子得点を用いた。

子どもに対しては、平成 25 年 9 月～10 月にかけて、40 名を対象に幼稚園の1室で面接調査を行った。面接では、社会的コンピテンスとして「対人的自己効力感」(12項目)の測定を4段階評定で行った。さらにその平均値(33.35点)で子どもを対人的自己効力感の高群・低群に分けた。

## (2)平成 26 年度

2年目の平成 26 年度は、幼稚園年中児クラスの 4 歳児を対象に、保育者の関わり、子どもの保育者への認知、子どもの社会性の発達(社会的コンピテンス、感情推論能力、向社会的行動)との関連について検討を行った。

まず、幼稚園年中児クラス 1 クラスの子ども 21 名に対して、保育者と子どもの関わりについて、平成 26 年 5~7 月にかけて観察調査を行った。子ども 1 人あたりの観察時間を 20 分×3 回とし、子どもの行動すべてをビデオカメラに録画した。録画された映像から、保育者と子どもが直接的・間接的に関わっているエピソードを書き出し、保育者の「自発的な言葉かけ」(10 項目)、「自発的な接近・遊びでの回避」(3 項目)、「自発的な身体接触」(3 項目)、「応答的な言葉かけ」(14 項目)、「応答的な接近」(1 項目)のカテゴリーに分類した。

さらに、上記の子どもに別のクラスの子ども 36 名を加え、計 57 名の子どもに対して、平成 26 年 5 月~6 月に感情推論能力、平成 26 年 9 月~10 月に保育者への認知と対人的自己効力感の面接調査をそれぞれ行い、平成 26 年 10 月~12 月に向社会的行動の観察調査を行った。

感情推論能力の測定においては、主人公が 5 つの感情(怒り・悲しみ・喜び・怖れ・嫌悪)を生起する感情推論ストーリーを作成し、主人公がそれぞれの感情をどれくらい強く感じているかを表情カードを用いて子どもに推論させ、3 段階で評定した。また、保育者への認知の測定においては、CCT 尺度 (Children's Cognition of Teacher) 8 項目を用いて、子どもが保育者に受容されていると認知しているか、拒否されていると認知しているかを評定した。対人的自己効力感の測定においては、年少時点での調査と同様に、「対人的自己効力感」(12 項目)の測定を 4 段階評定で行った。向社会的行動の測定については、2 名の観察者が子どもの自由遊び場面を 20 分×2 回観察し、向社会的行動のエピソードが生じた場合に記録を行った。記録されたエピソードから、向社会的行動の方略として、「身体的援助」「言語的援助」「慰め」「共同作業」「分与」の 5 つに分類し、さらに他者からの向社会的行動の要求を拒否した場合に「拒否」と分類し、それぞれの頻度をカウントした。

## (3)平成 27 年度

3年目の平成 27 年度は、幼稚園年長児クラスの 5 歳児を対象に、母親の養育態度、育児不安と、子どもの愛着関係、母親・保育者に対する認知、社会的コンピテンスとの関連について検討を行った。

まず、平成 27 年 6 月に、母親に養育態度、育児不安を測定するための質問紙を幼稚園を通して配布、回収を行ったところ、84 名の母親から回答を得た。因子分析の結果、養育

態度においては第 1 因子「自立尊重的態度」、第 2 因子「威圧的態度」、第 3 因子「保護的態度」の 3 因子が抽出され、育児不安においては、第 1 因子「育児負担感」、第 2 因子「子どもの発達への不安感」、第 3 因子「育児への非充実感」の 3 因子が抽出された。分析には因子得点を用いた。

子どもに対しては母親の質問紙を回収後、平成 27 年 9 月~12 月にかけて、33 名を対象に幼稚園の 1 室で面接調査を行った。面接では、CCP 尺度 (Children's Cognition of Mother)、CCT 尺度 (Children's Cognition of Teacher) 各 8 項目を用いて、子どもの母親・保育者に対する受容的認知、拒否的認知について測定した。また、社会的コンピテンスとして「対人的自己効力感」(12 項目)の測定を 4 段階評定で行った。

さらに、26 名の子どもに対して、平成 27 年 11 月~12 月にかけて、ドールプレイ法により愛着得点を測定した。幼稚園の 1 室で、家族(父・母・本人・きょうだい)の人形を用いて愛着に関連する 3 つのストーリーを子どもに提示し、子どもにストーリーの続きを作らせ、その様子をビデオに録画した。録画されたビデオから、評定尺度を基に複数の評定者で愛着得点の評定を行った。

## 4. 研究成果

本研究では、対人関係が広がり始める幼稚園年少から年中、年長にかけての 3 年間の縦断研究の中で、子どもの社会性の発達を追跡し、それに対する母親、保育者といった重要な他者との関係性がどのような影響を与えるのかについて、包括的な検討を行った。

### (1)3 歳時点での特徴

子どもが年少児の段階においては、社会的コンピテンスである「対人的自己効力感」が高い群の子どもの母親の方が、低い群の子どもの母親よりも養育態度の「自立尊重的しつけ」が多いことが示された( $t=2.09, p<.05$ )。一方、自尊感情については子どもの対人的自己効力感との関連は見られなかった。

このことから、幼稚園に入園したばかりの 3 歳時点においては、家庭で母親が子どもの自立を尊重する養育態度を取ることが、子どもが園や新しく出会う仲間に対して自分一人で色々なことがやれるという自信を形成することを促すため、園での仲間に対する対人的コンピテンスの発達に影響する可能性が示唆された。

### (2)4 歳時点での特徴

子どもが年中児の段階においては、子どもに対する保育者の関わり「遊びでの話しかけ」( $r=.49, p<.05$ )、「応答的賞賛」( $r=.48, p<.05$ )がそれぞれ多いほど、子どもは保育者から受容されていると認知していることが示された。

また、子どもが保育者から受容されていると認知しているほど子どもの対人的自己効力感が高く( $r=.37, p<.01$ )、子どもが保育者から拒否されていると認知しているほど子どもの対人的自己効力感が低い( $r=-.28, p<.05$ )ことが示された。さらに、子どもの対人的自己効力感が高いほど、仲間に対する分与行動が少ないことが示された( $r=-.27, p<.05$ )。子どもの保育者への認知と、感情推論能力、向社会的行動との間には有意な関連は示されなかった。

以上の結果から、子どもが4歳時点における子どもの保育者への認知は子どもの仲間に対する社会的コンピテンスと関連し、その仲間に対する社会的コンピテンスが向社会的行動と結びつく可能性があることが示唆された。

### (3)5歳時点での特徴

子どもが年長児の段階においては、母親の育児不安の「育児負担感」が高いほど子どもの対人的自己効力感が低く( $r=-.38, p<.05$ )、子どもが母親から拒否されていると認知しているほど対人的自己効力感が低い( $r=-.32, p<.05$ )ことが示された。また、母親の育児不安の「育児負担感」( $r=-.41, p<.05$ )、「子どもの発達への不安感」( $r=-.53, p<.01$ )がそれぞれ高いほど、「寝室のお化けの話」における子どもの愛着得点が低いことが示された。

以上の結果から、母親の育児不安は5歳時点での子どもの愛着、仲間に対する社会的コンピテンスにマイナスに影響すること、さらに子どもが母親から拒否されていると認知することは仲間に対する社会的コンピテンスを低める可能性が示唆された。

### (4)まとめ

本研究の結果を総括すると、3歳~5歳までの3年間において、幼児の母親、保育者との関係性は幼児の社会的コンピテンスの発達に重要な影響を及ぼすこと、その影響の仕方は子どもの発達とともに異なる様相を示すことが示唆される。

## 5. 主な発表論文等

[学会発表](計 2件)

Natsumi Sonoda. Effect of maternal self-esteem and parenting style on young children's emotional cognition. European Congress of Psychology, Milan (Italy). 2015.

Natsumi Sonoda, Japanese preschoolers' social self-efficacy and maternal characteristics. International Association for Cross-Cultural Psychology, Reims (France). 2014.

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

園田 菜摘(SONODA Natsumi)  
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授  
研究者番号：00332544